第二言語習得における母語の影響

奥 田 祥 子

The influence of the mother tongue over second language acquisition

Okuda, Sachiko

1．はじめに

幼児が第二言語（L2）を習得する過程でどの程度，母語（L1）の影響が見られるであろうか。またどのような形で実際のデータにその影響が現われるであろうか。幼児といっても年齢的な幅があるので，本論文では約3歳から5歳の子どもを分析対象とし，その英語習得におけるL1の影響について言及する。山本（2005）は英語習得におけるL1の影響を取り上げ‘英国在住の日本語を母語とする1幼児を被験者として，日本語の構造がこの児童の英語の統語習得過程に直接的だけでなく間接的にも影響を与える[1]’(p.7）と述べてL1がL2習得に影響するという仮説が立証できたと結論付けている。L1がL2習得に与える影響については今までにもL1のtransfer（転移）として多くの研究が進められてきた。しかし後述するように影響の程度については異なる意見が出されている。

Ellis（1994：19）は初期のエラー研究について

> Much of the early work on learner errors focused on determining the extent to which L2 acquisition was the result of L1 *transfer or creative construction* (the construction of unique rules similar to those which children form in the course of acquiring their mother tongue).

と学習者個々による独自なエラーとともにL1による転移はエラーを生み出す原因になると論じられてきたと述べている。構造言語学はエラーの原因をL1による転移であると主張し，対照分析の方法によって言語学習の困難点を予想できるとした。しかし，その予想は実際のデータと合致しないこともあるとわかり，むしろL1習得者にも異なるL1を持つさまざまなL2学習者にも，共通するエラーが見られると指摘する研究が多くなってきている（Odlin, 1989: 3 ,ほか)。Gass & Selinkerはそれにもかかわらず，

> We feel, however, that there is overwhelming evidence that language transfer is indeed a real and central phenomenon that must be considered in any full account of the second language acquisition process（1983：7).

と積極的にその影響を認めている。

最近のL2研究ではL1の影響について言及することが少なくなったが，以上の観点からL1がL2に及ぼす影響について考察するのは現在でもL2習得研究にとって意味があると考えられよう。なお奥田（1988）ではエラーを33型に分類し，滞米経過時間との関連やL1の影響の点から論じているが，エラーは必ずしもL1の影響だけで起こるとは限らないことにも言及している。

2．分析対象者について

L1の影響について山本のデータと奥田のデータを比較して検討するが，両者のデータ収集にはかなりの違いがみられる。山本のデータの対象となった子どもは主に4人である（山本の研究ではD児は分析対象者となる場合とならない場合があるが，L1の影響に関しての議論ではほかの子どもと同様に扱われているので，本論でも分析対象とした）。山本の対象児のデータ収集開始年齢はさまざまであるが，収集期間は奥田の対象者O児より長期にわたり3年以上になっている。またデータ採集開始年齢が3歳前後とO児に比べると年齢が低く，しかも英語の環境に入ったのがそれよりもまだ幼い頃で，L1の知識も認知能力も十分に発達していたとは言い難い状況であったと考えられる。もっとも山本は‘3歳過ぎという小さな子ども達であるが，彼らの初期の基本的な英語の語結合の習得には，自分達の母語である日本語の直接の影響が強く現われた（p.65）’という立場を取る。こうした点で同じL1を背景にしていても山本と奥田の対象児には現われるデータに違いがあることも予想される。

本論文の分析対象となったのは下記のように山本と奥田の対象児を含めて5名である。

表1　研究対象児[2]

対象児	データ採集開始時	渡英（米）時	小学校入学時	帰　　国
A	3歳4ヶ月	3歳	5歳4ヶ月	3歳5ヶ月
B	2歳6ヶ月	1歳7ヶ月	4歳10ヶ月	6歳9ヶ月
C	3歳3ヶ月	2歳7ヶ月	5歳6ヶ月	7歳7ヶ月
D	3歳4ヶ月	1歳3ヶ月	6歳	
O	5歳2ヶ月	5歳2ヶ月	5歳8ヶ月	6歳3ヶ月

3．L1の影響

L1の影響は言語転移として研究が進められてきた。本論文ではL1の影響を以下のような定義にそって考える。

……language transfer is the use of native language (or other language) knowledge－in some as yet unclear way－in the acquisition of a second (or additional) language (Gass & Selinker, 1983：372).

すなわち，言語転移とはL2やその他の言語の習得にL1あるいはそれ以外のほかの言語を使用することである。山本（2005）は英語をL2として習得する場合の統語構造におけるL1の影響を調べた。本論文もその観点から議論する。転移には否定的転移（negative transfer）としてエラーを生み出す転移と，L1と習得対象言語が言語的に似ている場合の肯定的転移（positive transfer）として，習得が容易になる転移に分けられる。

エラーについてはL1の影響が大きく否定的転移によるとみる研究と，反対にL1の影響ではなく，多くのエラーは学習者に共通したものであると述べる研究とがある。たとえば，Ellis（1994：302）はDulay and Burt（1973）の研究ではエラーの3％がL1に起因するとするが，Tran-Chi-Chau（1975）では51％にのぼり，ほかの研究では平均して約30％がL1の影響であるとみなされると述べ，その違いを表にして詳しく比較している。

CorderはL1の影響をborrowingとstructural transferに分け後者が直接，学習に影響すると主張する（1983：92）。さらに

> For syntax, he（=Corder）suggests that the "starting point" of L2 acquisition is not the native language, rather that there is a universal starting point which is something like a universal core（Gass & Selinger, 1983：8）.

とL2の習得初期はL1の影響よりも普遍的なものによって左右されると述べている。

4．山本と奥田の研究の比較

山本の日本語影響説に従い，奥田の対象者と山本の対象者の英語平叙文における統語構造の習得をいくつかの型に分け比較する。山本は語順の相違が英語習得の難しさの原因であると述べ（p.6）統語構造の相違に焦点をあてて，下記のように構造の難易を対照分析に基づき分類した。

表2　習得の容易さと困難さの予測のモデル[3]（例）

英語構造		日本語構造	類似か相違か	容易か困難か
節型	SC	SC	類似	比較的容易
	SV	SV	類似	比較的容易
	SVO	SOV	相違	比較的困難
	SVA	SAV	相違	比較的困難
	VO	OV	相違	比較的困難
	VA	AV	相違	比較的困難
句型	所有者's＋所有物	所有者[の]所有物	類似	比較的容易[4]
	形容詞＋名詞	形容詞＋名詞	類似	比較的容易
	前置詞＋名詞	名詞＋助詞	相違	比較的困難

*山本はSCの構造にコピュラ詞（=Be-動詞）を入れている。したがってSCにS＋Cop（コピュラ詞）＋CとS＋Cの構造を含める。S＋Aux＋VもS＋Vとして扱う。

英　日　英　日

前頁の表２で，動詞の位置の違い（VO 対 OV，VA 対 AV）と前置詞と後置詞の違いが，日本語を L1 とする子どもにとって習得が困難な英語の構造を導き出すと明確に記されている。この予想は L1 とL2 の構造が似ているときは習得が容易で，異なるときは困難であるという対照分析の考えに基づいている。したがって，この３つの型の習得過程を見ることが，L1 がどのように L2 習得に影響を及ぼしているかを説明することになるであろう。

山本は‘日本人児童たちは，［主語＋動詞］などの日本語統語と似ている語結合の型を除き，［動詞＋目的語］，［動詞＋副詞句］などの日本語とは反対の語順からなる語結合の型はなかなか生産的にならなかった（p.228-229）’と L1 にない構造の習得は困難であることを述べている。また下記の‘４種類の発話は，日本人児童と発達時期を同じくする英米児のデータには[5]，めったに見られないものである。このような発話が日本人児童の英語発話にあったということは，彼らの英語が日本語の構造に強く影響を受けたという証拠になる’と例を挙げて説明している（p.66）。この４種類の型を特に取り上げ，以下で検討する。

山本では次のような構造に L1 の語順の影響が現われるとしている。

１．語頭転倒

this play　(="I'll play with this")　AV [副詞＋動詞]

this ones pull　(="Pull this one")　OV［目的語＋動詞］

bananas eating　(He is eating a banana.)　OV

papers reading　(She is reading a paper.)　OV

２．本動詞の省略

I'm cup of tea.（="I would like a cup of tea"）［主語＋目的語］

I'm toilet.（="I want to go to the toilet"）［主語＋副詞句］

主語が I'm である場合がほとんどである，と山本は述べている。

３．コピュラ詞の使用および不完了（a, b ともにコピュラ詞が関わる）

a）コピュラ詞

対話者：“How many are there?”

A　児：　together is ten.（=　みんなで10個だよ）

対話者：“How old is your brother?”

C　児：　now is ten（今10歳よ）

b）不完了　（山本では不完了とは‘言い始めたが，何らかの理由で発話が続かなかった’ものと定義されている。p.24）

（本に書かれているロボットを見ていて）

this one's

this one's

I got this one's (="I've got this one")

This one's が目的語の部分であることに気付いて，最後に言い直す（山本：71)。

4．否定疑問への答え

対話者：He doesn't fit on, does he?

B　児：yeah (="No")　(うん，はまらない)

これは日本語をL1とする子供のみならず成人にも見られる間違いである。Yes, no の使い方の間違いで，L1に引きずられた結果による。

以上の型がO児にはどのように現われるか奥田のデータを見てみよう。

1．　me look at.　(=Look at me)

this I wanna.　(=I wanna this)

melon more　(=more melon)

Sarah, happy birthday, come on　(=Sarah, come to my birthday party)

big school, you not coming　(=You are not going to the big school)

2．　I'm soda　(= I would like to have soda.)

I'm blue　(= I have blue)　(Yoshida, 1978)[6]

ほとんどI'mの型であるが，後述するように山本と奥田ではこの型の分析は異なる。

3．a)

Sarah is do that　(=Sarah did that.)

Sarah is　(=Sarah did.)

this go is here　(=This goes here.)

Chaco is my doggy is beautiful　(=Chaco is my dog and it is beautiful)

この場合のコピュラ詞はすべてisである。

b)

what's your name is

if you are any

この3．aの型については山本と奥田に違いが見られる。すなわちコピュラ詞でつなぐ要素は山本の場合，たとえば，now is ten で now を ten と結びつけ L1 である日本語の語順に従っているが，奥田の場合は this go is here のように this go を here と結びつけるのにコピュラ詞を使用している。語順としては，この場合は英語も日本語も同じであるが is の使用が英語を L1 とする子どもには見られないエラーとなっている。O児のこの構造は山本の対象児とは同じパタンを示しているとはいえない。

O児には山本の例と同じパタンで2の本動詞の省略はおこるが，I'm というチャンクを伴った

型が本動詞の省略とみるかどうかについては奥田と山本では見解が異なる。奥田の研究ではO児のI'mの型は，本動詞の省略とはみなしていない[7]。この2のI'm Xの型はL1である日本語では早くからよく使用される構文である。この型がエラーとして特に注目されるのはL1とL2の使用範囲の制限が異なるためであろう。I'mの構造はチャンクとして習得され，それに多様な要素が付加されると考えられる。Yoshida（1983）の例でもわかるように日本語をL1とする幼児の英語習得に一般的に見られるエラーであり，成人にも見られるエラーである[8]。

3．aについては前述したようにO児はコピュラ詞を使用して独自の規則をつくり使用する。このコピュラ詞の構文はO児の独特な文型でエラーとなっているが，O児の中間言語としてある程度の期間，規則的に使用される。しかしながらO児のこの規則は山本の研究対象児には見られない。その理由のひとつに同じような構文に対して，異なる解釈をすることがあげられる。奥田がコピュラ詞で所有格をあらわすと解釈する一方で，山本は「歯擦音付加」としてD児のデータに現われたmaskmans belt, this ones mineやSarahs goneの-sを歯擦音を付加した構文ととり，それはL1の影響で助詞および助動詞の代わりになる（p.224）とみなしている。いずれの構文に関しても奥田はmaskman's belt, this one's mine,（あるいはthis one is mine), Sarah is gone（あるいはSarah has gone), であると解釈し，コピュラ詞か，所有格の's か，hasであるとみる。したがって山本の歯擦音を日本語の助詞および助動詞の代わりとみなすのは納得できない。

奥田がO児の中間言語にはコピュラ詞が規則的に使用され，重要な構文を形成していると解釈するひとつの大きな理由はO児の発話には明らかにisが発音されているためである。奥田のデータには3．aに見られる例のほか，次のような所有格を示す例が多く見られる。こうした発話でO児は規則的にisを発音する。たとえば，

Lauren is mother　(=Lauren's mother)

I know Neup is friend. (=Neup's friend)

Queen is baby　(=Queen's baby)

Brownie sister is name is Ann　(Brownie teacher's name is Ann)

コピュラ詞で所有格をあらわすのは前述した3人称・単数・現在を示す（e)sをあらわすのと同じ般用の例であろう。所有格や3単現のsを分解して使用する例はO児の中間言語としてしばらくの間（滞米8ヶ月目まで使用例がある），正しい所有格の規則と併用される。これはL1の影響というより，O児独自の規則（creative construction）を打ち立てた結果によるエラーとみなすことが出来る。

以上述べたようにコピュラ詞の解釈に違いがあるので，似たような間違いについても必ずしも両者の分析結果が同じにはならない。しかしながら，奥田の対象児と山本の対象児には習得の類似点が多く，L1の影響も同様に見られる。4に関しては成人の英語習得者にもよくみられ，疑いもなくL1の影響であるとみなすことができる。この誤りは長年英語を学習している者にも見られることがある。

L1の影響とは限らないが，山本と奥田の研究対象児にみられる習得の類似点を２～３挙げると下記のようである。

1．Iの代わりにmeを主語として使用　（これはL1習得の子どもにもよく見られる）

And me dirty.（O児の発話：滞米４ヶ月）

Me bathroom　（O児の発話：滞米７ヶ月）

2．同一セッションで同じ語句を何度も使用した奥田の対象児と同様に，山本の対象児も同じ語句を使用するという方略を使った。たとえば，50回近くもoh, dearを発したり，セッションの半分近くの発話がOKであったりした（山本，P.24）。これはO児のセッション（滞米２ヶ月）における200回以上にのぼるoh, lookの発話を想起させる。

3．山本の対象児と奥田の対象児では驚くほど習得構文の型が類似している。またO児の発話，I like it a penのように不必要なitを使用することも同じである。定型表現の使用が多いためであろう。しかし個人差もある。

山本は子どもたちがどのようにして，VOやVAなどの語結合を習得したのかについて興味深い仮説を立てている。これは「定型表現に基づく学習」（「formulaic learning」）によると山本はいう。

……（子どもたちは）日本語の発達過程において語結合の習得経験が既にあるので，まず，周りで話されている英語の談話の中でフレーズや語のまとまりを蓄積し，そうして蓄積したフレーズのいくつかからパタンを抽出しようとしたことは十分考えられる。例えばVOというまとまりに対する認識は，S+VOという区切りからではなく，むしろ，パタンに基づいたSV+Oの区切りからきたように思えるのである。そうした仮説を支持するものとしては，４人の児童が一様に頻繁に使用した<I like X>，<I got X>などで，Xが入れ替わるパタンがあげられる。またVAについても，４児とも，SV+Aの型の［生産的］な発話は<I ('m) going to X>に基づいたものから始まり，最初のうちはこのパタンしかなかったのが特徴である（p.73）。

この仮説は奥田のデータからみても充分納得できるものである。奥田（1985）の研究でも同様な習得方法については言及され，論議されている。O児は年齢にもよるのであろうか，多くの定型表現を使用し，２種類以上の表現型を組み合わせて長い文を生み出し，コミュニケーションを図った。

O児はthis go is here, this is go is here, Brownie sister is name is Ann, this is Buick beautiful, car is go aheadなどを発話したが，こうしたisが３人称・単数・現在を示す（e)sであるのか，所有格の 's にあたるか，あるいはL1の影響で山本の分類するコピュラ詞の使い方であるのか，いくつかの可能性が考えられる。たとえばthis go isはthis goというL1にも通用する統語構造をisを使用して他の要素と結び付けたと考えることも可能である。山本との大きな違いはO児の発話では明らかにisと発音していることであり，その型が規則的に使用されていることである。

結論

山本と奥田ではデータに関していくつか相違点が見られる。第一に山本の研究対象児は奥田の対象児と比べると，L1 習得が十分でないうちに L2 である英語の習得を始めたと考えられることである。山本は‘一般的に母語の習得は，３歳ごろまでにある程度なされると言われているので，３歳児は，英語の発達に及ぼす日本語の統語の影響を見るのに適当であると考えられた(p.14)。’とするが，実際に英語の環境に入ったのは，それぞれ１歳７ヶ月，２歳７ヶ月，３歳とかなり早い時期である。もっとも家庭での使用言語が日本語であるので日本語習得は自然に続けられていたとみなすことができるが，環境そのものは日本での L1 習得とは異なる。第二として山本のデータ採集は英語の環境に入ってからかなりの時間を経てから開始されている点である。これは英語圏に入った初日からデータ採集を始めた奥田の研究とは異なる。第三として，山本は複数の対象児がいるのに対し，奥田は１人の L2 習得を追っていることである。またデータ採取期間に関してもかなりの違いがある。山本は長期にわたるが，奥田はほぼ１年間である。このような違いを考慮しても両者の研究では L1 による影響自体はあると結論でき，５児に共通した型も見られる。ただし，奥田と山本ではデータの解釈に相違点がある。

O 児は年齢的に山本の対象児よりも L2 習得を始めたのが遅く，それだけ L1 能力も認知力も高いので，最初から英語は L1 である日本語とは違うこと，自分の英語能力が十分ではないという認識があった。また長い文をチャンクとして覚え，活用し，コピュラ詞を使用して他の要素を結び付け，それを中心にして L2 活動を行ったので L1 の影響はあるものの山本が強調するほどではないといえる。奥田（1988）では L1 の影響は少ないと結論している。

> He（=Kellerman）claims that language transfer is promoted in cases where the product results in a more systematic, explicit, and logical interlanguage（Gass & Selinger, 1983：9).

とすれば，Corder の主張と同様に，言語習得初期よりそれ以降で L1 の影響が見られることになる。

注

1．山本がここで言う直接的影響と間接的影響とは次の通りである。直接的とは実際に目に見え，耳に聞こえる言語への L1 の影響であり，間接的影響とは回避，般用などを引き起こす言語活動である。

2．B 児は最初，小学校に付設の幼稚園に入学する。ほかの子供は最初から小学校へ入学したらしい。O 児は渡米まもなく小規模な幼稚園に入園，最初の頃は原則として１日４時間ほど通園する。家庭での言語はほかの児童と同様に日本語であるが，母と２人の生活であったので日本語を話す機会は山本の対象児より少なかったかもしれない。

3．表２は山本（p.63）から借用した。

4．O 児は所有格について独自な規則をたてて使用したが，後には正しい形と併用することもあっ

た。しかし，正しい形のみの発話はなかなかできなかった。O児がこの規則をかなりの期間，使用したことは習得が容易である構造が必ずしも正確に習得できるわけではないことを示しているといえよう。

5．なお英国人児童はSO/A, VO/Aを先に発話し，SVO/Aは2歳過ぎから生産的に使用する。日本人児童はSCが最初に多く発話されると山本は述べている。

6．Yoshidaの対象児のデータは3歳児。

7．コピュラ詞を動詞扱いしない理由を山本（p.46）は述べているが，奥田では動詞扱いすることが両者の分析の違いのひとつとなっているのだろう。

8．文脈によってはこの表現が英語をL1とする成人によっても使用されることがある（久野暲・高見健一，2004）。

参考書目

久野暲・高見健一（2004）『謎解きの英文法—冠詞と名詞』くろしお出版

奥田祥子（1985）「言語習得方法—文型を中心にして」『語学教育研究論叢』 第2号 pp.37-58.

奥田祥子（1988）「第二言語に於ける“error types”」『大東文化大学紀要』 第26号 pp.71-86.

奥田祥子（1991）「文構築—滞米7ヶ月の場合」『大東文化大学紀要』 第29号 pp.71-81.

奥田祥子（1992）「Be動詞の般用について」『大東文化大学紀要』 第30号 pp.329-337.

山本麻子（2005）『子どもの英語学習—習得過程のプロトタイプー』風間書房

Corder, S. Pit. (1983). A role for the mother tongue. In Susan Gass & Larry Selinker, (eds.) *Language Transfer in Language Learning.* pp. 85-97. Rowley, Mass : Newbury House Publishers, Inc.

Ellis, Rod. (1994). *The Study of Second Language Acquisition.* Oxford : Oxford University Press.

Gass, Susan & Larry Selinker, (1983). *Language Transfer in Language Learning.* Rowley, Mass : Newbury House Publishers, Inc.

Kellerman, Eric. (1983). Now you see it, now you don't. In Susan Gass & Larry Selinker, (eds.) *Language Transfer in Language Learning.* pp.112-134. Rowley, Mass : Newbury House Publishers, Inc..

Odlin, T. (1989). *Language Transfer.* Cambridge : Cambridge University Press.

Yoshida, M. (1978). The acquisition of English vocabulary by a Japanese-speaking child. In E. Hatch (ed.) *Second Language Acquisition : A Book of Readings.* pp.91-100. Rowley, Mass : Newbury House.

(2005年9月24日受理)